

正 信 念 仏 偈 20

■天親讃①

天親菩薩造論説
帰命無碍光如来

天親菩薩『論』（浄土論）を造りて説かく、
無碍光如来に帰命したてまつる。

現代語訳

天親菩薩は『浄土論』を著して、「無碍光如来に帰依したてまつる」と述べられた。

~~~~~

☆天親菩薩（5世紀頃）



- ・七高僧の第二祖
  - ・ガンダーラ地方プルシャプラ出身  
(現在のパキスタン・ペシャワール地方)
  - ・兄、無著の勧めにより部派仏教から大乘仏教に転向
  - ・「千部の論主」と呼ばれ、浄土真宗では特に『浄土論』が重要な聖教
  - ・親鸞聖人の「親」の一字は、天親菩薩から取られている。
- ※「鸞」は第三祖・曇鸞大師から

紀元前330年頃にアレクサンドロス大王の遠征軍がペルシャを越え北インドまで制圧し、ギリシャ文化を持ち込んだ。その後も紀元前2世紀にはバクトリア王国のギリシャ人の支配を受けるなど、西方文化の流入は続いた。つまりガンダーラの仏教美術とは、仏教とギリシャ美術が融合した結果である。



弥勒菩薩交脚坐像（ガンダーラ）

『浄土論』願生偈

世尊、われ一心に尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて、安楽国に生ぜんを願ず。

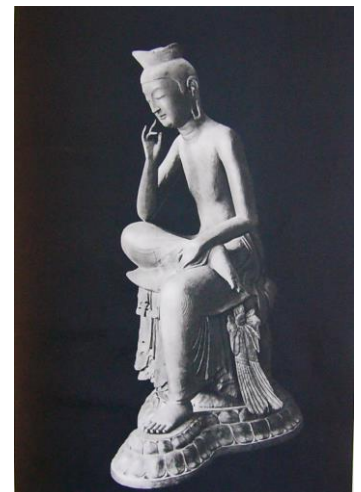
→ 天親菩薩の信心表白

○阿弥陀如来をなぜ「光」で表現するのか

第十二願（光明無量の願）

わたしが仏になるとき、光明に限りがあつて、数限りない仏がたの国々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

→ 十方を照らす仏となっている



弥勒菩薩半跏思惟像（広隆寺）

令和4年 5月14日 信行寺仏教入門講座

親鸞聖人『唯信鈔文意』

光明とは智慧なりとしるべしとなり。

⇒ 仏教において我々の煩惱を無明の闇と表現し、ブツダの悟りの智慧が光明で表現される。

『仏説阿弥陀経』

舍利弗、なんぢが意においていかん。かの仏をなんぢがゆゑぞ阿弥陀と号する。舍利弗、かの仏の光明無量にして、十方の国を照らすに障礙するところなし。このゆゑに号して阿弥陀とす。また舍利弗、かの仏の寿命およびその人民〔の寿命〕も無量無辺阿僧祇劫なり。ゆゑに阿弥陀と名づく。

無碍光 ⇒ さわりなく私に届けられる

外障 …… 外的な障害物を障げとしない

内障 …… 私の煩惱を障げとしない

#### 慶信房からの質問

念仏を申している人びとの中に、「南無阿弥陀仏」と称える合間に「無碍光如来」と称えている人もいます。これを聞いてある人が申すには、「南無阿弥陀仏と称えての上に、さらに帰命尽十方無碍光如来と称えることは遠慮すべきことです」というのですが、この状況はどうしたものでしょうか。

#### 親鸞聖人の回答

「南無阿弥陀仏」と称えて、さらに「無碍光仏」と申すのは悪いということこそ、大変な誤りであります。「帰命」は「南無」を翻訳したものです。「無碍光仏」というのは光であり、智慧であります。この智慧はまさしく阿弥陀仏です。阿弥陀仏の御はたらきをご存知でないから、それをはっきりとお知らせ下さろうとして、世親菩薩（天親）が御ちからを尽くして「帰命尽十方無碍光如来」とお示し下さったのです。

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ （正像末和讃）

阿弥陀如来の本願は、煩惱によって迷う衆生を照らす灯火であるから、智慧の眼が暗いと悲しむことはない。阿弥陀如来の本願は、生死の大海での救いの船であり筏であるから、証りへの障りとなる悪業が深いと嘆くことはない。

たとえ暗闇であっても、一筋の光があればそれを頼りに歩いていくことができる。阿弥陀如来の光とは、自分の命がどこに向かっているのかわからない、あたかも闇のなかを歩んでいる人生に差し込んでくる言葉である。その言葉こそ「南無(まかせよ)阿弥陀仏(われに)」であり、私を浄土へと導いていく。